

～被害者と共に考え、共に歩む～

vol.56

支援センターだより



「山岸運送グループ犯罪被害者支援プロジェクト」



令和5年12月1日から、鳥田市にあります山岸運送グループ様(代表取締役社長 山岸一弥氏)のご協力をいただき、「山岸運送グループ犯罪被害者支援プロジェクト」と命名し、山岸運送株式会社が所有する大型トラック1台に犯罪被害者支援広報をプリントした「静岡犯罪被害者支援号」の運行により走る広告塔として一翼を担っていただくとともに、同車両が走行した距離に応じ、犯罪被害者支援のための寄付に協力していただけるという全国初の取組みを行うことになりました。

同日、山岸運送株式会社大柳物流センターにおきまして、覚書の締結及び「静岡犯罪被害者支援号」出発式を執り行いました。

～ 目 次 ～

- 山岸運送グループ犯罪被害者支援プロジェクト
- 「犯罪被害者等支援講演会inしずおか2023」
演題:居場所を奪われた犯罪被害者 講師:市川武範氏
- 「袋井市犯罪被害者等支援条例」制定
～誰もが安心して暮らせるまちをめざして～
袋井市長 大場規之氏
- 「性犯罪被害者支援専門研修会」開催
- 「犯罪被害者週間」広報活動報告
- 会費納入者・寄付者ご紹介、寄付のお願い

静岡県公安委員会指定 犯罪被害者等早期援助団体
認定NPO法人(特定非営利活動法人)

静岡犯罪被害者支援センター



電話相談

054-651-1011

受付時間：10時00分～16時00分

(土・日・祝日・年末年始を除く)

犯罪被害者等支援講演会 in しずおか 2023

講演 『居場所を奪われた犯罪被害者』 講師：市川武範氏

令和5年11月24日(金)、静岡県葵区服町の札の辻クロスホールにおきまして、「犯罪被害者等支援講演会inしずおか2023」を開催しました。講演会では、令和2年5月26日、長野県坂城町で発生した坂城町銃撃事件で、長女・杏菜さんと次男・直人さんを亡くされた市川武範様を講師にお招きし、ご講演をいただきました。

市川様ご家族が事件後に受けたメディアによる誤報やインターネットの心無い書き込みに苦悩し続けた際の心情などを中心に、講演の内容をご紹介します。報道の在り方やネット上の書き込みによる誹謗中傷。そして、未だ不十分な公的支援など、今一度、犯罪被害者やご遺族の状況や心情に触れていただき、一人ひとりが何をすべきか考えるきっかけとなれば幸いです。

【事件。そして、苦しみの始まり】

令和2年5月26日、深夜。自宅に暴力団幹部の男が侵入し、長女と次男が銃殺されました。二人とも頭部を撃たれて、翌朝亡くなりました。男も自宅リビングで頭部を撃ち、自殺したとみられています。加害者死亡のため、真相は分かりません。想像することしかできません。「被疑者死亡」で書類送検され、この一件は処理されております。

しかし、私たち遺族にとって、それで終わりではありませんでした。さらに辛い仕打ちが待っていました。「なんで、暴力団が来るんだ」「組の関係者だから?」「対立してたとか、もともと危ない家族だったから」「組の幹部が自殺だなんて、よっぽどのことをしてかしたんだろう」そんな風に第一印象を持たれた方も多かったのではないのでしょうか。マスコミも飛びつく、そんな衝撃的な事件と思われたのではないのでしょうか。ちなみに、私の甥は警察官です。友人、知人にも警察官はたくさんいますが、反社と呼ばれる組織の親族は、私の知る範囲では一人もおりません。危ない一家でしょうか。

事件翌日の27日。早朝から私の携帯電話は鳴りっぱなし。報道機関からの問い合わせ。友人、知人からの心配の声。「いったい何があったのか」「どういうことなのか」。それはこちらが聞きたいくらいでした。現場となった自宅には戻れないため、県警の緊急宿泊制度により3日間の避難先を提供されました。「3日だけ?」と思いましたが、その間に親戚などの頼れる避難先を見つけてほしい旨、話をされました。「あ、そういうものなのか」と思うだけでした。その避難先を見つけられずに、結果的には2週間後に民間アパートを借りることになりました。風呂なし、洗濯機置き場なし



です。コインランドリーはお金が必要になるので無理。公衆浴場も行ける状態、心境ではなかったので、「絞ったタオルで体をふくことになるのかな」そう思っていました。

【様々なメディア報道による誤報】

メディア報道を目にしたのは、5月28日が最初だったと思います。新聞、テレビですね。そこには、警察の事情聴取で話した事実とは違うことや表現のされ方、言い回しなどで違和感を覚えることが多かったです。

〈犯人は一階の窓ガラスを割り、侵入〉自宅は平屋建てです。もともと一階しかありません。

〈犯人は玄関を叩いたが鍵がかかっていたため、隣の部屋の窓ガラスを割って〉犯人は玄関など叩いてはいませんし、いきなり金属バットでリビングの窓ガラスを叩き割って侵入してきたのです。記事は間違っている。

〈犯人の名に『さん』を付けた呼称〉すでに逮捕状が出ていながら見逃し、逮捕できないうちに起きた銃撃事件の犯人を、『さん』付けなんか呼んでほしくない。

〈長女の職業は飲食店員〉居酒屋レストランでしたから正しいのですが、多くのネット住民からはキャバクラ嬢と取られた書き込みが多かった。写真を探してみたがないとか、「みつけた」と言って別人の顔写真だったりだとか。なぜそうなるのでしょうか。なので、このことは報道の間違ひではなく、報道を目にした方々への問題提起、注文となるのでしょうか。もっとも、当時の私は、ネットの書き込みの捉え方や書き込みの偏りに戸惑い、飲食店員以外の職業の言葉はないものかと考えていましたし、記者に伺っていたりもしました。

〈3か月ぐらい前から、あるいは1年ぐらい前から白い車がうろついていて、長男に嫌がらせをしていた〉犯行に使われた車は、白いセダンでしたが、犯人自身が所有し普段乗っていた車は白ではありません。きっと逮捕されないよう仲間から借りて、犯行に使った車の色が白だっただけです。白い車なんて営業車も含めてたくさん走っています。取材を受けた近隣住民の思い込みだったのではないのでしょうか。何より、長男が嫌がらせを受けていた事実なんて一回もありません。

事件の2日前の24日。勤務先の会社の目の前にあるコンビニ駐車場で、同じ会社に勤める、違う部署ではあるものの、気が合いそうな女性社員と話をしていたところに、突然現れた見知らぬ大男。身長は180から190cmの間。体重は100kg近い、まるでレスラーのような髭面の大男に車

を壊され、暴行を受けました。怪我をし、私と共に警察に被害届を出し、男には逮捕状が出ていました。男は女性社員の離婚している元夫でした。その元夫が犯人です。ちなみに長男はその女性社員の自宅も住所も携帯番号さえも知らない間柄です。暴力団員と結婚していた過去があるなんて知る由もない。とぼっちりもいいところです。皆様もそうではありませんか。自分の勤める会社の人々が、暴力団と関わりがあるなんて思ってもみないのではありませんか。勤務先の前の店で話すことのどがおかしいのでしょうか。そして、最大のとぼっちりを受けたのは、銃殺された我が子二人です。果てなき未来を奪われてしまった。こんな理不尽な形で。

〈捜査関係者によると、死亡した犯人と長男の間に女性を巡るトラブルがあった〉という記事。あまりにも無神経で無責任の発言であり、報道のされ方でもあると思います。長男が可哀想すぎます。何も悪いことなんてしていないのに。

〈県警は家族も保護指定し、避難を進めていたが家族が断った〉という報道。24日に暴行を受け、翌25日に被害届を出し、その日の夕方に加害者が自宅に現れたことを受け、自宅がパレテしまっている。それ故に長男は保護指定され、警察の保護下に避難しました。私たち家族には避難の提案はありましたが、保護対象に指定はされず、警察と協議の上、危害を受ける危険は少ないとのことで避難をしませんでした。ちなみに、その時点で長男は保護指定されたにも拘らず、警察から言われたのは、「長男の避難先は自分で探してくれ。宿泊費は自分持ちで払ってくれ」でした。てっきり、警察から提供してもらえるものだと思っていましたので、正直驚いたのですが、「殺人事件のような凶悪犯罪でもなければこんなものなのか」という、半ば諦めに似た感じで受け止めていました。犯人が逮捕されたら、民事裁判でもして請求してくれということなのでしょう。

〈市川さんは外出中〉私は、26日は仕事をし、犯行時刻は帰宅しようと車に乗り込むところでした。警察の調書にはそう記されているはずなのに、なぜ報道では勤務先となっていないのだろう。外出中でも間違いではないですが、それを見開きた皆さんは、どう思われるのでしょうか。「こんな大変な時にどこをほつき歩いているんだ」「武範、どこへ行った」そんなネットの書き込みがその答えです。被害者保護を意識した警察からの発表。記者会見や報道の文言が大切なのだと思います。私の心が深く傷ついたのは言うまでもありません。

〈長男と犯人の元妻は同僚〉同僚と聞くとどう感じますか。一緒に仕事をしていた仲良くなったのだろう。その最たるものが職場恋愛であり、職場結婚ではありませんか。そして、ざらにあることです。スキャンダラスな連想をされやすい表現でもありました。事実、そんなネットの書き込みが多かった。

さらに、〈元妻〉。犯人目線の言葉です。長男の目線にしてみれば、『勤務先の他部署の女性社員』です。印象が変わると思いませんか。紙面のサイズや放送時間の短縮のために簡略化されたのでしょうか。それらの報道のされ方により、長男が銃撃事件の原因にされてしまったと感じます。しかも尾ひれがついて。家には中傷ハガキが届き、長男と私がいじめられ、ネット上では〈不倫関係にあった〉とか〈犯人が死んで、二人は邪魔者がいなくなると幸せになれる〉だとか、もう様々なただの憶測から生

まれたであろうことばかりが事実のように書き込まれました。離婚していれば不倫とは言いませんし、そもそもそんな事実はありません。しかし、それを読まれた方は事実誤認をしまい、同情をされないどころか、非難をされてしまいました。私たちは。後日、それも半年も一年も経ってから事実を報道しても、なかなか浸透しません。それは、「あー、あの事件のことか」と読んでもらえなかったり、「どんな事件だったっけ」と過去のサイトを検索して、誤った過去の記事や書き込みの認識に戻されてしまったり、いかに最初の報道が大事で、責任が重いということをメディアの皆様には受け止めていただきたいと思います。それはネットサイトを立ち上げた、あるいは書き込みをする方々もです。後に事実を知ったとしたら、自らサイトや書き込みの削除をすることを求めます。

関連することとしまして、こんなこともありました。一昨年の10月、地元局のテレビ信州というテレビ局の『チャンネル4』というドキュメンタリー番組を見た方から、翌朝、「テレビ見た?可哀想にね」と、私が当事者だとは知らずに、知らない方からそう話しかけられました。「そうですね」と私。すかさず隣にいた方が。その人は現場となった自宅のある坂城町の住民なのですが、「そんなものしょうがないじゃない。あのうちの長男が暴力団の妻を寝取ったんだから。そんなの当たり前のことだわ。やられて当たり前」どうにか私が、「でも被害者なんだから」と言っても、「そんなもん、関係ねえさ。ヤクザの女に手を出したんだから」そしたら、さっき可哀想と言ってくれた人も、「あら、そうだったの。それじゃあ仕方ないわね」となってしまいました。悲しいですね。怖いことですね。まだ削除されていません。間違った情報のサイト、書き込みは。

〈「近所にも不審者に警戒するよう注意喚起してくれば防げた」と話す近所の60歳代の男性の言葉〉という記事がありました。それは、その男性からの私たちに對する注文ですよ。見ず知らずの男からいきなりの暴行を受け、被害届を出したばかりの私たちに、近所に注意云々ができるはずもない。そんな時間がどこにあるだろうか。この人はいったい何を言っているのだろうか。記事も何を書いているのか。まるで、私たちが悪いと言っているではありませんか。近所の男性にも、メディアに対しても不満だらけでした。しかも、最初から『男との面識はなかった』と新聞でもテレビでも報道されていたではないですか。読解力の低さを恥じてほしい。また、普段見かけない高級外車がうろついていたら、通報してほしかったです、その近隣住民の男性には。初期の報道の混乱は、ある程度は仕方がないと思っています。だが、しかし。「日数が経っても一向に訂正がされない。いったい警察は何を発表しているのだろう。」という疑問と不信感に苛まれていました。

〈妻は近所に逃げ込み助かった〉そんな報道もありました。それも昨年です。「私は逃げたんじゃない」そう言って苦しみ、「私が撃たれていればよかった。目の前にいたのに助けてあげられなかった」悲しみ、苦しみ続けている妻。足がすくみ、動けなくてもおかしくない切羽詰まった状況です。でも妻は、玄関ドアの鍵を開け、助けを求めて外に駆け出した。雨上がりの泥道を、ソックスのまま駆けて、近所に助けを求めた。そして、犯行現場の自宅に戻ってきたところで、私と落ち合った。逃げ込んでいますか?逃げてなんかいません。怖いはずの犯行現場に戻ってきたんで

すよ。たった一人で。二人の我が子を助けたい一心で。

それを<逃げ込み、助かった>とは何ですか。そう報じたメディアから謝罪をしていただきたい。怒りに満ちてしまっています。

<長男と犯人の元妻は、同じ職場で働く仲>これも昨年の報道ですよ。もういい加減にしていただきたい。これ以上誤った報道で、苦しい思いをさせないでいただきたい。被害者遺族にとっては、たった一言では済まされない、命を落とすことにもつながりかねないセンシティブな言葉なのです。

<男は長男の名を叫びながら次男を撃った>男は金属バットで窓ガラスを叩き割り、拳銃を取り出しながら、長男の名を叫びながら、「どこだ、どこにいる」と叫んでいたのです。寢室のドアを開け、次男の直人を見たとき、「だれだ、てめえ」。直人に銃口を向けた。直人を長男と間違えたわけではありません。明らかに別人と認識してながらも発砲しています。この記事も間違っている。

私が出会ってきた記者の方々は、とても真摯な姿勢で話を聞き、心を汲み取っていただいたように思っているのですが、いざ報道となったときに、なぜこのような被害者、遺族が辛い思いをすることになってしまうのでしょうか。世間に発する前に、当事者に確認するという作業が必要な場合があるのかもしれませんが。場合によってはということですがけれども。つまり、誤った情報を正したいときに、さらに誤った報道をしないように、そんな策を組んでいただきたいと強く思います。

【インターネット上での書き込みまでも…】

国からの犯罪被害者給付金の見舞金は、二人分の合算で680万円でした。事件から9か月後に支給されました。自動車の自賠責保険のように掛金がありませんので、その性格は違うものなのかもしれませんが、二人の命はその程度で済まされてしまうのかと悲しみに包まれました。ネット上にまたしても書き込みがされました。「税金から支払われるんだから贅沢な文句を言うな」「生命保険を掛けていなかったお前の責任だ」被疑者死亡で損害賠償金も取れません。仮に民事裁判を行うことができ、勝訴したとしても加害者側に支払い能力がなければ、支払われることなく終わってしまう。刑事裁判のような強制力のない民事の判決。被害者への配慮に欠けていると思います。生命保険、そこまで自助を求めますか。仮に疾病などにより、こども保険、学資保険、生命保険への加入を拒否された人はどうするれば良いでしょうか。そんなときこそ国が助けになってほしいと思います。一国民としても。自分のものさしだけで書き込みをしたり、第一感情だけで事実確認も不十分な内に書き込みをしてしまうのは、危険を伴います。言葉は命を奪う凶器となりますから。本人を目の前にしても、同じことを言えるのでしょうか。一歩立ち止まって、冷静に発言、発信していただきたい。ただし、人を救うことができるのも、そんな素晴らしい力があるのも、言葉の持つ魅力です。できるだけ人を救う道具の一つとして、言葉を選んで、言葉の花束を捧げていきたいですね。

【自宅が事件現場。居場所を奪われた被害者】

住居の話ですが、当初、自宅のある坂城町に一時避難先として町営住宅を借りることを、警察を通して依頼しましたが、加害者が暴力団員という理由で断られてしまいました。他の住人に危害が及ばないようにという理由でした。それが理由となると私たちには住む場所がないということです。暴力団は執拗です。どこに身を隠そうが必ず見つけ出して報復しようとするでしょう。募集停止をしている、もう壊すことが決まっている所でも、町役場の会議室でもどこでもよかったです。私たちには。一時的な避難場所なのですよ。行政機関は条例などの一文で謳われていないと何もしてくれないのですね。警察による現場検証の間は、自宅には入れないですよ。そして、凄惨な現場となった自宅に入ることも困難な私たち一家です。真冬ではなかったので、車の中で凌ぐことも考えていました。警察からは3日ごとに避難先の延長をされましたが、それも2週間が限度でした。坂城町と同じ理由で断られてしまう恐れを抱きながらも、アパート経営している知人に打診をし、借りることができましたが、「大丈夫なんだよね」と聞かれてしまいました。なんて答えればよいでしょう。

【病院の受診までも断られ…】

心の痛みが激しい妻と長男の精神科受診を予約しました。翌日、院長から電話で断れてしまいました。院長曰く、「私には患者、スタッフ、病院を守る義務がある。わかるでしょ?」と。断られた理由は坂城町と一緒にです。例え事件が解決しても、金輪際一切関わりを持つことはない。来ないでくれということでした。

【近所の住民からの心ない言葉】

事件から3週間後、初めて被害に遭った自宅の片づけを始めました。ようやくです。外に散らばったままの窓ガラスの破片の数々と共に、伸び放題で道路にまで横たわっている長く伸びた草。梅雨時でしたからね。草も伸びますよね。ところが、すぐに隣人の男性が自転車に乗ってやってきて、私が不安を抱きながらもやっとの思いで、「おはようございます」とあいさつの言葉をかけると、亡くなった二人へのお悔やみの言葉もなく、いきなり怒鳴られました。

「何がおはようだ。何を考えているんだ。お前は。規制線張られて、近所の者はみんな迷惑していたんだ。謝って歩くのが当たり前だろう。隣組回って歩いたって1時間もあれば済むだろう。何を考えているんだ。事件から何日経っていると思ってんだ」

この人はいったい何を言い出すんだろう。火事を出してあいさつ回りをするのはわけが違うでしょ。事件から3週間しか経っていない。悪いのは犯人。謝るなら犯人の家族にさせると言いたい。こんな人がこの地にいることが悲しかったし、悔しかったです。

事件後の私たち家族の状態と心中はどうだったのか。妻は二人の後を追いたがっていた。目が離せない。一人にはできない。ガス、ハサミ、包丁など自殺道具となるものは手元には置いてはおけない。長男は普通に過ごしているように見えていましたが、平気なわけがない。

「大丈夫」と言ってみたり、「まだ無理」と言ってみたり、不安定なのは当然です。まさに気が狂ってもおかしくないような、そんな状態です。警察からの緊急避難先を出なければならぬとき、「俺一人で坂城の家に住んでもいいよ。お袋は無理なんだから。二人はどこか見つけて」犯行現場の血だらけのままの家に住んでもよい、そんなことを言ってくれたんですよ。優しい子です。その長男も今では坂城町の自宅に入ることができなくなっています。心に受けた傷が深いということです。時間が経てば解決される。そんな生易しいことではないということです。時が経つほど辛くなる。繰り返しますが、誤った情報によって被害者である私たち家族が悪者にされてしまっているんですよ。事件の原因とされている。坂城町という所には、「市川』という姓は片手で数えるほどしかありません。なので、すぐにあの事件の家族だとバレてしまいます。坂城町出身。住所、本籍地を消す。知られないようにする。変更する。名を変える。私と妻が離婚して、妻の旧姓にする。そんな風に世間から逃れることばかりを探っていました、私たちは。

【事件から4か月、半年が経ち…】

事件から4か月が経とうとしていた頃でしたか。なぜ、逃げなければいけないのか。何にも悪いことはしていない。非難されているのは、誤った報道がされ、世間が勘違いをしたままだからだろう。やっとなりに気づくことができました。やっどです。どうすればいい。世間の間違った認識を解かなければ、『市川』と堂々と名乗れない。そう感じていました。事件から半年経った11月下旬の、折しも「犯罪被害者週間」に地元紙である信濃毎日新聞に連載記事が載りました。そこには事実のみ書かれ、とても助けられました。この時の記事が、その後の私がお話をする叩き台となっていると思っていますが、それから以降、いくつかのメディアで発言させていただき、段々と世間の認識が変わってきているようにも感じています。地元紙の信濃毎日新聞は、事あるごとに取り上げていただいています。その後、NHK長野のネット配信されている記事。私の心情に配慮しつつ、世間に訴えかけてくれています。やはり、昨年ですが、読売新聞の長野版ではありますが、<亡き子。思い出辿る旅。坂城銃撃二年。一緒にいる感覚。生きる力に>と題して、温かい記事を書いていただきました。妻がメディアの取材に応じたのはこの時だけです。

関西の放送局なのですが、毎日放送で特集され、MBSニュースとして動画配信されており、系列局のTBSで再編集された特集記事が『ニュース23』という番組でも放送され、犯罪被害者への脆弱な支援を取り上げていただいたり、関西の放送局ですが、朝日放送テレビが特集放送し、その動画をABCテレビニュースとしてネット配信されており、この特集は人物の相関図を用いて、時間をかけて、丁寧に説明していただいているので、勘違いや誤りの無いように配慮され、事実をきちんと伝えていただいております。昨年、9月5日の産経新聞では、これによいのかと問題提起をしていただいた新聞記事を書いていただきました。今年の夏、テレビ東京でWBS(ワールドビジネスサテライト)の中で特集が組まれ、テレ東bizというネット配信番組で10分間のミニドキュメンタリーと

して、どなたにもご覧いただけるようになっています。また、来週発売の週刊新潮にも記事が載りますので、ご購入いただけたらうれしく思いますし、放送日が決まっておりますが、日本テレビで毎週土曜日、17時からニュース番組の中での特集も近いうちに放送される予定であります。

報道機関からの取材で、被害者の生活困窮がテーマのようでしたが、通帳をカメラに取らせてほしい。家族の収入、経済状態をカメラに収めたい。妻が精神を患ったのは、事件が原因で、事件後からの診断だという証拠がほしい。妻の給料がいくら知りたい。亡くなった子供たちの生前の状況確認の証明の提供の云々。要求が様々でしたが、どんな意図をもって企画し、そのためにはどのようなものが必要で、何のためにそうなのか。報道会社側ではない私にはわかりません。知りません。まず、そこから説明してもらわないと。その上で、先ほど述べたものの提供ができるかどうか、確認する手順を踏んでいただかないと取材には協力できません。当然断りました。だって、究極の個人情報ではありませんか?どれも。いくら「モザイクをかける」「分からないようにする」「何か問題が起きては市川に迷惑が掛かってもしけないから、真実だという証拠はカメラには収めるけれども、世間に見せることはしない」などと言われても。でも、でもですよ。その個人情報を制作会社の複数の方は見るわけでしょ。残されるわけでしょ。記録として。例えば、生活保護の申請のために資産残高、世帯収入など確認作業の手続きを行政職員が確認するのは訳が違うでしょ。いま、このときを、この場で生きているのです。どんな辛さ、悲しみ、苦しさ、悔しさを抱え、これからの人生においてもずっと背負って生きていかなければならない、その最中にいる私にそれをしろというのですか。メディアからの二次被害です。これでは。もっと思いやりの姿勢で臨んでいただきたい。このような扱いをされてしまうと、私たち被害者はただの道具にすぎず、声をあげてみようとする被害者が減ってしまうと感じます。声なんて上げられませんか。無理です。

私は顔を伏せてメディアに出ています。居場所も伏せています。実の父にも隠しています。なぜか。自殺した犯人の両親は生きています。謝罪の一言もありません。小学生が誰かに怪我をさせたら、保護者が付き添って謝罪しますよね。それが成人するとできないのでしょうか。もしかしたら、「うちの子が死んだのは市川のせい」などと見当違いの逆恨みもしているのかもしれませんが。だとしたら、どんな嫌がらせをしてくるか分かりません。突然切れて、殺しにくるかもわかりません。何の情報もありません。警察も教えてくれません。私は別に殺されても構いません。子育てが済んでいますから。子育てが済んだら死んでしまう生物もいますものね。でも、妻は違います。こんな辛い想いのままで命を奪われたりしないように、守らねばならない。長男も違います。これからの生きていってほしいし、幸せを感じて生きてほしい。その未来を守らねばならないと思っています。その意味では、私たち被害者はどこまでいっても居場所が狭いということです。安心できる場所がありません。そんな窮屈な生活をしています。仮に遺族の市川だと分かったとしても、知らん顔をしてください。近所に言いふらさないでください。皆様は、もし当事者がいてもそっと見守っていてあげてくださいね。

【私に対しての加害者】

私に対しての加害者は、その主犯は、私に怒鳴ってきた隣人。私の妻にまで怒鳴ってきたその隣人夫婦です。頭を銃撃され、悲鳴と共に崩れ落ちた杏葉の隣にいたんですよ、妻は。妻に、そんな妻に向かって、「なんであんな時間に助けを呼びに来たんですか。110番すればいいじゃないですか」あんな時間に襲われたから、あんな時間に助けを求めたんでしょ。110番?どこにそんな余裕がありますか。裁いてほしいです。二次被害の主犯として。さらには、『地域で寄り添う被害者支援。そして、被害者を孤立させない社会に』ということに反していると思いませんか。メディアでは誰なのかを特定されないよう『地域住民』としましたが、その地域の他の皆様には申し訳ないと思いつつも、そうするしかありません。『地域住民』と。でもこの一夫婦だけなんです。地域の他の方々は、例えば車の運転席からがんばってポーズをくれたり、「あら、市川さんじゃないの」なんていつも通りの接し方をしてくれたりして、とてもありがたかったです。痛いこの夫婦の言動。そうならないためには、『今、思うこと』、知ってください。私たち犯罪被害者のことを。遺族のことを。その存在を。その心を。そして、理解しようとしてください。気持ちに寄り添おうと思ってください。その意味では、条例制定した自治体の皆様にはたいへん感謝しております。制定して終わりではない。その後、どう住民の皆様にも周知していただくかが大切です。

【手記を寄せて】

さきほど、私の手記がハートバンドという全国の被害者のネットワークにも載ったとお話をさせていただきました。昨年、20回大会が開かれ、その20回を記念して本年5月に記念誌が発刊されまして、その手記集も関係機関には配られているのですが、ネットには載っていないので、ちょっと読まさせていただいてもいいですか。私の手記です。手記を書いたのはちょうど一年前です。なので、事件から二年半のその時の私の気持ちです。

事件から2年半の今。遺族となり、坂城銃撃事件で二人の子を亡くしてから、その月日が経つのが早いこと。仕事を終え、帰宅しようとした私の携帯の着信音。その日の朝は何かあってはいけないと、警戒をし、駅まで送り届けた次男と最後のあいさつの声。「行ってくるね」その日の夕方心配した私の電話に、「うん、大丈夫」と答えた長女の声。忘れるわけがない。忘れたくなんかない。忘れるものか。でも、記憶は薄れていくもの。本当にこんな声だった?どんな表情で答えていた?住んでいたあの家に今も暮らしていたら、思い出すことができるのかもしれない。二人が座っていたリビングの場所。長女の部屋の机。引き出しの中。ベッドの上の布団と枕。目覚まし時計。ロッカータンス。次男の乗っていた

自転車の駐輪場所。パソコンに向かっていた姿勢。記念品を飾っていた棚。そのままにして動かさずに遺しておきたい。もう二度と住むことがない、住むことができなくなってしまったあの家。新築をし、鍵の引き渡し日に産院から退院してきた次男。子育てのために必要と考えたからこそ建てた家と共に住むことになった次男。まるで運命的なものを感じた幸せに溢れたときでした。この子と共に生きていく家。たくさんの幸せを運んでくれるような気持ちにさせてくれるような家でした。本当に幸せに暮らしていましたよ。楽しい笑い声が多かった家でしたよ。2020年5月26日、23時までは。27日は二人の命日となりました。受け止めるのに精いっぱい。受け入れられない。日が経っても現実でない感覚が、いつまでも続く。不思議な毎日。その内面の一方で、現実の世界の時間は止まりません。さまざまなことがずっしりと重く乗り、押し潰されそうでした。住居のことは非常に苦しみました。一時的に避難する場所に苦しみ、そこを退去しなくてはならないときに苦しみ。長期的に住む場所の確保に苦しみ。まったく悪いことをしていない被害者がこんなにも辛く、苦しい思いをしなくてはならないのか。大きな疑問を持ちました。静かに振り返り、分析していくと、これからどうしたいのか、何をすべきか、どうなりたくて、どうあるべきなのかを段々と考えられるようになってきました。メディアの記者を通して、翌年3月のシンポジウムで、被害者の声で発言することにつながりました。こんな短い期間にたくさんの方々とはつながりを持つことになろうとは思ってもみなかったし、戸惑いの感覚でもありました。自治体での条例制定。より充実した条例の見直しなども大切なことだと思いましたが、長野県での県条例制定に際しても、意見陳述のメンバーとしてお声がけいただき、また他県へお呼びいただき、講演やディスカッションの経験、手記集への寄稿。本当に様々な方々とのつながりを持って、心強くなる現在です。

一方で、被害にあった自宅の片づけは、遅々として進んでいません。仕事の復帰もままならない状態です。ただ固定資産税を払い続けていくのか。これからも。人を信じたいという姿勢が、基本、私の中にはありまして、人によって傷つくことはあるけれども、救われるのもまた人によってなんだということ、高校時代に強く感じた経験があるんです。なので、今回の事件によって起きた様々な出来事。出会った様々な人たち。これからの人生において、宝物になるようにしていきたいと思っています。過去も現在も、そして未来においても、無駄になる事柄なんか何一つないと言える。そう思える人生を紡いでいきたいと強く願っています。そんな生き方をしていくことが、亡くなった二人の子の命を意味あることにする方法だと思っています。二人も「パパらしい。それでいいよ」と言ってくれと信じて、これからも私のことを必要とくださる方がいる限り、私の声を聴きたいと思ってくださる方からの声が届く限り、精一杯のことをしていこうと思っています。





「袋井市犯罪被害者等支援条例」制定

～誰もが安心して暮らせるまちをめざして～



袋井市長 大場 規之 氏

袋井市では、犯罪被害に遭われた方やそのご家族が平穏な生活を取り戻せるよう支援するとともに、誰もが安心して暮らすことのできるまちの実現を目指して、令和5年9月29日に袋井警察署、静岡犯罪被害者支援センターと連携協力に関する協定を締結し、令和5年10月1日に「袋井市犯罪被害者等支援条例」を施行いたしました。

犯罪被害に遭われた方等の置かれた状況は、被害の程度や被害からの時間の経過などにより一律ではなく、直接的な被害のみならず、周囲の無理解などによる二次的被害に苦しめられることも考えられます。警察署などの関係機関と連携しながら、犯罪被害に遭われた方やそのご家族、ご遺族の心に寄り添い、適切な支援を行い、安全で安心なまちづくりを進めてまいります。



預保納付金助成事業 「性犯罪被害者支援専門研修会」開催

日本財団預保納付金から助成を受け、「性犯罪被害者支援に関わる人材育成」事業として「性犯罪被害者支援専門研修会」を開講し、性犯罪被害者にそれぞれ対応をされている産婦人科医をはじめ、弁護士や検察官等の専門家からの講座や他県の被害者支援センターの支援状況を学ぶ講座、さらにロールプレイを通し、改めて電話相談や直接支援の対応方法を学び、これまで以上に犯罪被害相談員等のスキルアップを図ることができました。

No.	開催日時	講座内容	講師
1	令和5年6月30日(金) 10:00～10:15	開講式 性犯罪被害相談・支援状況報告	①主催挨拶 理事 白井 孝一 ②状況報告 犯罪被害相談員 吉田 雅博
	10:15～11:00	警察における性犯罪被害者支援	警察本部警察相談課 犯罪被害者支援室 橋本 浩平 氏
	11:10～12:00	静岡県性暴力被害者支援センター「SORA」における支援	静岡県くらし交通安全課くらし安全班 王舎 深沢 倫世 氏
2	令和5年6月30日(金) 13:30～12:00	子どもの被害に対するメンタルケア	スクールカウンセラー 臨床心理士・公認心理師 石川 令子 氏
3	令和5年8月3日(木) 10:30～12:00	性犯罪に対する法的支援	オンライン法律事務所 弁護士 白井 孝一 氏 (静岡県犯罪被害者支援センター 理事長)
4	令和5年8月3日(木) 13:30～15:00	性犯罪に対する医療的支援 医療の場での被害者診療	静岡赤十字病院 産婦人科部長 根本 泰子 氏 (静岡県犯罪被害者支援センター 理事)
5	令和5年8月25日(金) 10:30～12:00	性犯罪に対する司法の取組 静岡県犯罪被害者支援センターとの連携	静岡地方検察庁 検察官 山崎 未生 氏
6	令和5年8月25日(金) 13:30～15:00	他県の被害者支援センターの 被害者支援を学ぶ	公益社団法人おみ犯罪被害者支援センター 副理事長・支援局長 松村 裕美 氏
7	令和5年12月15日(金) 13:30～15:30	被害者支援の実践、留意点 ロールプレイ	認定NPO法人被害者支援センター 顧問 NNNS認定コーディネーター 楠本 節子 氏
8	令和6年1月17日(水) 11:00～13:30	意見交換会・検討会	事務局



「犯罪被害者週間」広報活動報告

「犯罪被害者週間」の一環として、御前崎市、森町、三島市において、静岡県、静岡県警察、開催地域の市役所職員の方々と広報活動を実施し、多くの県民の皆様へ犯罪被害者支援へのご理解とご協力を呼びかけました。



また、昨年に引き続き、11月1日から1か月間、静岡市葵区呉服町の札の辻ビルにありますデジタルサイネージを利用し、CM動画を放映し、当支援センターの相談窓口の周知を図りました。

支援センターの運営を支えてくださる皆様

～こころより感謝申し上げます～

令和5年7月1日～令和6年1月31日

アイウエオ順(敬称は略させていただきます。)

あいおいニッセイ同和損害保険(株)	麻生 絵美	(一社)熱海市観光協会	(株)石井組
石渡 恵	石割 誠	(一財)市川交通安全財団	(株)伊藤園静岡相良工場
伊東市役所	稲葉 清美	猪之原 勝美	磐田警察署
内山 隆司	海野 耕司	S&K建設(株)	遠藤 栄子
大城 雄大	大庭 茂利	岡野 廣治	小國神社
長田建設工業(株)	おたちゅう沼津店	おたちゅう富士店	御前崎市
表富士工業団地協同組合	(株)加藤鉄筋工業	川嶋 見	川島 和文
函南町	菅野 雄児	栗栖 英俊	コーニングジャパン(株)
湖西地区安全運転管理協会	御殿場警友会	後藤 千代子	(株)コハマ
小林 省吾	坂本 武典	澤木 久雄	静岡県警察官友の会熱海支部
静岡県警察官友の会掛川支部	静岡県警察官友の会静岡南支部	静岡県警察官友の会浜北支部	静岡県警察官友の会浜松東支部
(一財)静岡県警察職員互助会	静岡県警察本部警察相談課	静岡県警察本部刑事課	静岡県警察本部警備部機動隊
静岡県警察本部公安課	静岡県警察本部交通指導課	静岡県警察本部生活安全企画課	静岡県警察本部生活保安課
静岡県公営競技連絡協議会	静岡県高速道路交通安全協議会	静岡県交通安全協会浜松西地区支部	静岡県交通安全協会袋井地区支部
静岡県交通安全協会森地区支部	(社)静岡県歯科医師会	(一社)静岡県指定自動車教習所協会	静岡県農協暴力防犯対策協議会
静岡市自治会連合会	静岡全国運輸事業研究協議会	静岡中央警友会	島田警察署
島田商工会議所	島元 正彦	清水警友会	清水 英之
下田警察署	下田警友会	(公財)社会貢献支援財団	庄司 善晃
白井 正巳	末木 宏典	菅野 寛也	鈴木 啓嗣
鈴木 敏弘	鈴木 智子	鈴木 智善	鈴木 雅士
鈴木 通代	鈴木(株)	裾野ライオンズクラブ	セキスイハイム東海(株)
曾我 一洋	高原 博美	高山 功	滝澤 聡康
田子の浦埠頭(株)	田中 広子	玉川 隆全	中部電力(株)静岡支店
塚本 大	寺田 佐千代	天竜警友会	天竜地区安全運転管理協会
(株)土井酒造場	東名興産(株)	鳥羽 茂	内藤 恭治
内藤 光雄	日機装(株)静岡事業所	沼津市役所	沼津駿東遊技場組合
浜北警察署	浜松市自治会連合会	浜松西警友会	浜松東警察署
原木 英三	司法書士 伴 信彦	POB反社対策連絡協議会	東静岡 天然温泉柿木の郷
平井 秀弥	福永 博文	袋井警友会	藤枝警察署
藤枝遊技業組合	富士岳南ライオンズクラブ	富士警察署	富士警友会
富土市役所	富士宮警察署	富士宮警友会	富士宮中央ライオンズクラブ
富士宮ライオンズクラブ	富士防犯協会	細江警友会	堀江 きよ
堀 康介	堀水 利恵	牧之原警察署	増田 享大
松澤 紘一郎	松本 喜代子	(株)丸川	三島警察署
溝口 敦	宮田 嘉彦	望月 威男	焼津市遊技業組合
安本 晋	山岸運送(株)	ヤマハ発動機(株)	山本 正子
吉田町更生保護女性会	吉田 雅博	良知 淳行	渡邊 弥生
割鞘 健太郎	匿名13件		

《賛助会員・寄付のお願い》

静岡犯罪被害者支援センターの活動は、皆様の寄付金等で支えられています。当支援センターの主な活動として、電話相談、直接的支援、支援員の養成・研修、広報啓発活動等を行っています。被害者支援活動の趣旨にご賛同いただき、ご支援ご協力をお願いいたします。

賛助会費 法人・団体 1口 10,000円以上
個人 1口 2,000円以上

賛助会員の方々には、広報誌「支援センターだより」などをお送りしています。また、被害者支援講演会等のイベントを開催する際には事前にお知らせいたします。

【振込口座】 郵便振替:口座番号 00870-7-50944
【加入者名】 NPO法人静岡犯罪被害者支援センター

ホームページアドレス

<http://www.shizuoka-hhsc.jp>

後援

静岡県警察本部
静岡県犯罪被害者支援連絡協議会



発行 認定NPO法人
静岡犯罪被害者支援センター
〒420-0032
静岡市葵区両替町1-4-15 芙蓉ビル4階
発行月 令和6年 3月